

坂の上の楓たち (その1)



市川二中同窓会
再発足20周年記念誌
2017

坂の上の楓たち

市川二中同窓会再発足20周年記念誌(2017)

その1の目次

- ・二中の揺籃時代 初代校長 高山 徳治
- ・trace the history (校章のなれそめ、運動場の整備、その他)
- ・目次
- ・ご挨拶 第4代 同窓会会長・16期 齋藤 康
- ・二中の絆 市川二中・現校長 佐野 典行
- ・祝辞 17代校長 中山 廣璋
- ・二中に残るもの 20代校長 寺嶋 捷夫



- ・地域と学校の架け橋 21代校長 齋藤 純
- ・♪わが学舎のはらからは♪ 22代校長 松永 潤
- ・歴史と伝統 23代校長 大嶋 章一
- ・「独り立ちの気概に満ちた生徒の育成」から「夢・命・絆」へ 24代校長 高鍋誠太郎

- * trace the history (校門坂と須和田口の坂)
- * trace the history (校歌)

二中の揺籃時代

高山徳治

夢多き若人達の学び舎である市川二中が現在の如く発展向上したことは創立当時から五年間学校長として勤務した私にとって眞実に一木一草も皆想い出の種でないものはないが、同窓會誌の発刊されるに当って思いだすままに當時の事を記して見よう。

先づ昭和二十二年五月学校長としての辞令を受取って眞間小に向かつて来た。所々の電柱や板塀に眞間小と二中の開校式の日時が張り出されてあった。眞間小に校長先生を訪問して行くと二中の教室、職員室、机、腰掛等の必要な調度品が一応揃えられて教室も整然とされていたので二度びっくり。一回の職員の顔合せもせず、一面識すらない教員同志且つ新設校がかくまでに整理されていた事は、一重に眞間小齋藤実校長先生の心からなる御配慮によるものであることが後に知らされて、二中関係者は今も感謝している次第であって、この事だけは特筆大書する責任が私にあるような気がする。この一事が市川市内五中学校が同時に発足しながら最も早く軌道に乗り、現在の如く発展した礎となつたのである。

次にあの無格構な帽章についてであるが、制定責任者の私はこのように考えている。それはあのもみぢの一葉が眞間の地名を代表するものであると。その理由は眞間山弘法寺に全国でも珍しい天然記念物二葉楓という樹がある。この一葉を二中の帽章に取り入れたものである。此の弘法寺こそは鎌倉時代の傑僧日蓮が弘めた宗派に属するもので、日蓮は我が千葉県が生んだ宗教的偉人である。私は生徒に宗教教育を施そう等ということは毛頭考えてはいないが、時の執権北條氏に対してその墮落を戒め自分の首を切られることは、黄金と泥土を交換するようなものと滝口で断首の刑に処せられるも平気で自己の信念に生き「われ日本の柱とならん。われ日本の大船とならん」と叫んだ人間日蓮こそ遠大な理想と確固たる自己の信念に生き抜いた人で、若人の以て範とすべき人だと強く信じている。それがたまたま二中の敷地と定まった須和田丘とかつては地続きであった所にあるので採用した。

職員には山荒らし、ぶか、生徒にはガアーチャン、トンチ、會長等という愛稱やニックネームもあつて全員和氣藹々のうちに過した事は何よりの懐しい想い出である。(自分の事は誰かゞかくだろう)

創立の昭和二十二年は全国的に食糧事情も悪くて臨時休業も加えて五十日の暑中休暇をやつたが二中は希望者を集めてその休を殆んど返上して空襲や疎開による空白を埋めて今日の基礎を職員父兄生徒で築いた。

最後に二中の生徒としてはあくまで誰もが清く明るく正しく生きると同時に遠大な理想を以て巢立ってもらいたい爲に校歌も三回程修正加筆して現在のようにまとまつたのであります。まだ色々書きたいこともあるが紙面の都合で省略いたします。

同窓會員の皆さんお元気で

昭和三十年四月十三日 浦安中学校校長室にて

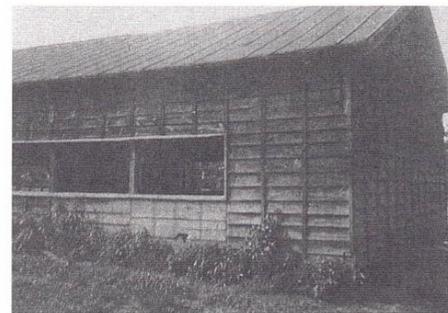
trace the history



二中が眞間小校舎で出発した年、中学生を印象づける白線を一本あしらった黒い学帽に「楓に二中」の帽章がつけられていた。須和田が丘と地続きであった眞間山は江戸時代紅葉の名所として知られ、多くの文人墨客が来遊し「眞間の紅葉狩り」を書画に残している。

初代高山校長は、眞間にゆかりの紅葉に思いをよせ、当時眞間山弘法寺にあった二葉楓という名木の一葉を帽章にとり入れたという。

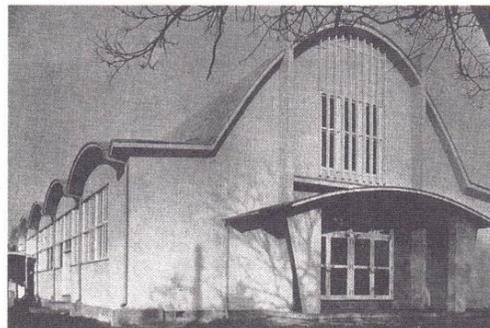
デザインは現日展理事の桜井慶治氏(創立当時の美術講師)。「楓に二中」は昭和26年11月、正式に市川二中の校章として制定され、校旗や徽章に使われている。なお、校章が制定されるまで、「楓に二中」の男子学帽に対して女子は青地に白の「桜に二中」の丸い七宝バッジを胸に付けていた。



創立当初から5年間教室として使用した、旧陸軍防空本部兵舎。



昭和31年、運動場の整備と観覧用スタンドの造成をすすめるために大規模な校庭の整備工事が始められ、翌年4月15日、造成工事は完了。



昭和33年2月10日、創立10周年記念行事として企画された講堂兼体育館が完成。

目次

二中の搖籃時代	初代校長 高山 徳治	表 2
◆Trace the history (校舎 校章 校庭とスタンド 講堂兼体育館)	同窓会会長 斎藤 康	4
↳挨拶	市川二中学校 佐野 典行	5
二中の絆	(同窓会再発足以降の歴代校長)	
祝辞	17代校長 中山 廣璋	6
二中に残るもの	20代校長 寺嶋 捷夫	7
地域と学校の架け橋	21代校長 齋藤 純	8
♪我が学舎のはらからは♪	22代校長 松永 潤	9
歴史と伝統	23代校長 大嶋 章一	10
「独り立ちの気概に満ちた生徒の育成」から「夢・命・絆」へ	24代校長 高鍋誠太郎	11
◆Trace the history (校門坂と須和田口の坂)		12
◆Trace the history (校歌)		13
ハゲ山の上の新校舎と粗末な教科書とイケメン先生と	1期 天野 睦子	14
一枚の年賀ハガキから 市川二同窓会再発足物語	1期 岸田 弘	16
市川二同窓会再発足20周年を迎えて	1期 桑村 益夫	17
能勢一雄先生と囲碁	2期 森山 正義	19
◆会報創刊号と復刊1号から5号の抜粋	1951年同窓会発足から2001年の概略	20
母校の思い出	5期 中路 徐子	25
同窓会との絆	5期 三村 武教	26
心のふるさと	5期 本吉 健也	27
二中時代の思い出	6期 井上富美子	28
暮れるまで裸足でドリブルしたっけね 女子籠球部の草分け時代	6期 佐伯 芙由	29
僕の二中	6期 高久 明利	30
◆手児奈霊神堂		31
◆須和田遺跡 会報6号から10号の抜粋	2002年から2008年の概略	32
二中時代のあんな事、こんな事	14期 印出 博美	37
(無題)	14期 栗生 明	38
同窓会? これでもいいのだ!	14期 鈴木 尚賢	40
ゴーゴー大会	14期 吉田 陽子	42
市川二中の思い出	16期 安藤 達夫	43
中三修学旅行日記	16期 斎藤 康	44
市川二同窓会再発足二十周年を迎えて	20期 深川 保典	46
◆会報11号から15号の抜粋	2009年から2013年の概略	47
市川二中へ入学できての感謝・思い出	21期 田中 澄子	52
カーペンターズがながれていたころ	25期 栗本 拓彦	53
強烈に脳裏に焼きつく数々の感動・大切な仲間・ハーモニ・宝物	40期 大作美由紀	54
二中の思い出	51期 孫 逸舒	56
◆会報16号から20号の抜粋	2014年から2017年の概略	57
編集後記	編集委員長 鈴木 尚賢	表 3



真間川(右手に真間小)



旧三木松碑

*表紙イラスト/藤本和則氏(19期)・藤本きよ子氏のご主人
*表記のない風景写真の撮影(全て'16年)/14期:高柳昌弘氏

ご挨拶

同窓会会長 斎藤 康(16期)

全国でも例が少ないと思う「市川市立第二中学校同窓会」は第二次世界大戦後間もなく、昭和二十六年に当時の高校生(第一期生)が中心になり発足しました。

その後、皆様が社会人や家庭人になり活動が停滞しました。しかし、母校五十周年記念史編纂の機会に機運が盛り上がり、平成十年に桑村益夫初代会長以下会員の熱意で当会は再発足できました。そして、二代目故篠崎實氏、三代目三村武教氏の会長のもと今日を迎えられました。

第四代目の会長として、この記念すべき再発足二十周年を迎えられたことに感謝すると共に大きな責任を感じています。

節目の二十周年を記念して冊子『坂の上の楓たち』を発行しましたので、会員の皆様に思い出等記憶を遡って頂けると有り難く思います。

二中の絆

市川市立第二中学校校長 佐野 典行

市川二中同窓会再発足二十周年おめでとうございます。

原稿執筆にあたり、『市川二中五十年史』を拝見いたしました。戦後の日本とともに歩んできた二中の歴史と伝統が、セピア色の写真と歴代の同窓会の皆様の思い出の言葉とともにたくさん詰まっています。また、保護者の皆様からは、「第二中学校は、私たちの親が卒業し、私の子ども達もこの学校を卒業しています」というお話をたくさん伺いました。卒業生や保護者、地域の皆様の二中に対する深い愛情と大切に育まれてきた太い絆に触れ、改めて身の引き締まる思いがいたしました。

「五十年史」の写真に写っている生徒たちは、誠実で幸せに満ち溢れた表情をしていました。それは七十年経った今の生徒たちも同じです。朝、門に立って挨拶をしていますと笑顔で元気な気持ちのいい挨拶が返ってきます。また、過日の入学式では、新入生のために心の籠った素敵な校歌を聞かせてくれました。その美しい歌声に、新入生を思いやる優しい心配りを感じました。これこそ時代を超えて二中学生が受け継いできたアイデンティティーなのだと思います。これは同窓会の皆様が、二中を愛し、後輩に伝え、守ってこられた大切な宝物であると思います。そして、このような学校に着任できたことを、心から嬉しく思いながら日々を過ごしています。

新学習指導要領では「社会に開かれた教育課程」をキーワードに、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら、生徒の育成に努めることの大切さが示されています。同窓会の皆様が築いてこられた学校と保護者、

地域との太い絆が、まさに必要とされ、地域とともに歩む学校こそがこれからの理想であると考えています。

学校教育目標である『夢』に向かっていく生徒、『命』を大切に
する生徒、『絆』を互いに深め合う生徒の育成に、全教職員一丸となって取り組んでまいりますので、今後とも、変わらぬご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

今年、七十周年を迎える第二中学校とそれを支えていただいております市川二中同窓会の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。

2016年



鈴木尚賢氏(14期)撮影

祝辞

17代校長 中山 廣璋

同窓会の再発足二十周年おめでとう、ございます。一口に再発足二十年と言っても並大抵の努力と協力、母校を愛する心がないとできるものではありません。継続している学校は市川にはありませんし、全国でも珍しいのでは。同窓会総会や講演、吹奏楽部との演奏会、会報の発行など活動が充実しています。記憶が曖昧ですが、当時会長の桑村さん、山田さん、天野さんをはじめ多くの方々が土曜日の午後には会議室で五十年史の編纂、同窓会名簿作り等に向け取り組んでいました。卒業式には同窓会会長としてご挨拶いただきました。ご挨拶いただくのは初めての経験です。

市川にもすっかりご無沙汰しています。記憶の範囲では、初任校長として着任し、諸事情で学級を替えることを始業式前に職員やPTA本部の方々に状況を説明、夜の保護者会では特に教頭、PTA副会長さんには大変お世話になりました。

翌日の始業式の新三年生には学級を替える話をしましたが、納得しないクラスがあったのは言うまでもありません。五月には修学旅行が迫っているわけですから。

当時、校長室は白百合学級の側にありました。その校長室に隣接する会議室では「ゆとり教育」や「総合的学習」の研修が盛んに行われていました。その「ゆとり教育」も今は改定されましたが、自主・自立を育てる大使館訪問は良いアイデアだったと思っています。

また、校門から玄関まで距離もあつたので、外で活動している部活動等の元気のいい挨拶が印象に残っています。更に石段

二中に残るもの

20代校長 寺嶋 捷夫

昨年、第二中学校にお邪魔した時のことでした。懐かしさもあり、高鍋校長先生との話が弾み、帰る時には部活動が始まっていた。車で来ておりましたので、活動の邪魔にならないようソロソロと動かししました。校門前で車を止めようとした時です。練習をしていたテニス部の生徒が、校門まで走ってきて門を開けてくれたのです。「ありがとうございます」とお礼を言い、開けてくれた門を閉めようと車を止めて外に出ると、その子が「さようなら」と挨拶をしながら門を閉めてくれていました。「ありがとうございます、練習がんばって」と声を掛け別れましたが、とても清々しい気持ちになりました。

時々、中学校にお邪魔しますが、子どもに校門の開け閉めをしてもらったのは初めてでした。二中の子どもの礼儀正しさ、人を思いやる気持ちを改めて感じました。

車の中で、さわやかな気分をかみしめながら考えました。二中の子どもが、さりげなくこんなことができるのは、長い間の生徒たちの派手ではないが、ひたむきな取り組みの積み重ねがあるからだと思に至りました。

私が二中にお世話になっていた頃、四月に一年生が入学すると、生徒会の役員が、毎朝昇降口で「おはよう」と声を掛けていました。それは、挨拶の習慣を、早くに身に付けて欲しいという上級生たちの思いの表れでした。そんな先輩の思い、活動があつて、学区の小学校の校長先生から「二中の生徒はきちんと挨拶ができる」というお褒めの言葉を頂いたこともありまし

作りのスタンドですね。過去も今も全く見たことはありません。お洒落なことと、見学するには持つて来いの場です。また、それに素晴らしい環境の良さです。学校前の坂道をてくてく歩いて登校、須和田公園の緑や自然の多さから校門まで情緒あふれる風景あればこそ某テレビ局がよく取材に訪れました。直接生徒に関係がないので断りましたが、ソメイヨシノは勿論、八重桜も私は好きでしたね。

昔、体育館の床が弾力あるゴム製だったのを覚えています。今は当然違いますが、その体育館で五十年式典を実施し、その後は同窓会の『二十周年記念誌』を作成する運びとなったこと重ねてお慶び申し上げます。まさに歴史の流れの速さを痛感しています。本当におめでとう、ございます。

2016年



鈴木尚賢氏(14期)撮影

もう何年も前の生徒たちの活動ですが、校門の前で私を見送ってくれた子どもの姿に、何年も前の生徒たちの思いが今も引き継がれていることを改めて感じさせられました。このことだけでなく、第二中学校には先輩たちが残してくれた沢山の遺産があります。いつかまた、そのすてきな遺産に触れられるといいなと思っています。

2016年



鈴木尚賢氏(14期)撮影

地域と学校の架け橋

21代校長 齋藤 純

『同窓会再発足二十周年記念誌』が制作されますこと、誠にありがとうございます。心よりお祝い申し上げます。

私は、平成十八年四月より三年間本校に勤務し、当時の会長篠崎實様、私の高校の先輩である桑村益夫様を始め、同窓会の皆様には大変お世話になりました。

平成九年の創立五十周年を機に、毎年会報を発行し、年代を超えて同窓生が集う同窓会の総会が開かれていることに出会いました。私はそれまで勤めた学校ではなかったことでしたので、大変驚くとともに素晴らしいことだと思えました。

同窓会の皆様には、卒業式・入学式・体育祭などの学校行事にとどまらず、日頃から学校の教育活動に対し、温かいご支援をいただいたことが一番の思い出です。

「ようこそ先輩！二中タイム」（総合的な学習）という時間で、学習支援活動として、同窓会の講師の方々から、毎年何回か在校生にお話しをしていただきました。例えば、「話し方、コミュニケーションの取り方」「中国などの国際関係の理解について」「長崎での被爆体験について」など、生徒たちは一生懸命聞き、熱心に質問していた姿が思い出されます。

また、須和田祭では、野菜・果物・花などの即売をしたり、懐かしのフォークダンスを在校生と一緒に踊ったり、体育館で同窓会委員の代表の方々が全校生徒の前に、質問に答える形式で昔の中学校生活の思い出を語っていただきました。生徒たちは、須和田祭をとっても楽しみにしていて、嬉しそうに参加していた姿が今でも印象に残っています。

♪我が学舎のはらからは♪

22代校長 松永 潤

「はらから」とは、「同胞」「仲間」という意味ですが、校歌では、我が二中の「はらから」は「浄く明るく直きを心に♪」と歌っています。卒業後何年たっても、そんな「はらから」と過ごした中学校時代をふと懐かしく思うこともあるのではないのでしょうか。

私は昭和五十六年から平成元年までの八年間、二中に教諭として勤務しておりました。その間、学級担任として卒業生を三回送り出した後、生徒指導主任を務めるとともに、剣道部とサッカー部の顧問を務めました。幸い縁がありまして、二十年ぶりに再び二中に校長として勤務しました。

二十数年前に二中を巣立っていった「燃ゆる希望の若人♪」は、今では立派な社会人として活躍しています。中には二中の保護者となり、現在の第二中学校をバックアップしてくれている卒業生も多くいます。中学校時代に手のかかった生徒が、案外に子ども思いの良い父親母親になっていることが分かり、大変嬉しく思っています。子育てでも教育でも、手をかければかけただけの成果は表れるのだと実感しています。

定年退職して五年、当時の卒業生や保護者の皆さんと当時を懐古しつつ一献傾けることが、現在の至福の時となっております。教師冥利に尽きると感じています。

校長として勤務しました平成二十二年度には学校教育目標を生徒にインパクトのある目標、「夢・命・絆」へと新たにしました。その目標に向け、東日本大震災の被災地への支援「トモダチ作戦」やお年寄りとの交流会等の実施の際にも、また入学式・

本校を卒業された方々が、よりよい校風をつくろうと努力され、今もなお本校を愛し、見守り続け、応援してくださっていることは、開校以来少しも変わらないものだろうと感じます。同窓会が、これからも学校と地域を結ぶ懸け橋となりますことを、心より祈念しています。

2008年



卒業式の横断幕の制作等にも同窓会の皆様には多大なるご支援を賜りありがとうございました。

二中同窓会が、単に同窓生のためだけの組織ではなく、二中の学校教育においても、二中の応援団として、多々ご尽力頂いていることをご紹介しつつ、改めて感謝申し上げます。

「我が学舎のはらから♪」の会である「市川二中同窓会」の創立二十周年を心からお祝い申し上げますとともに、同窓会そして会員の皆様の益々のご発展とご健勝をご祈念申し上げます。引き続き二中の教育充実にご理解とご協力をお願い申し上げます。



歴史と伝統

23代校長 大嶋 章一

歴史と伝統のある第二中学校におきまして、同窓会再発足後二十周年記念に向けて、様々なことに取り組んでいることをとても嬉しく思っています。

早いもので第二中学校から第八中学校へ異動して二年目の後期を迎えました。第二中学校での数々の思い出を胸に秘めながら、第八中学校に愛着をもって勤務しております。第八中学校は、初任から五年間勤務した学校で、正門からの校舎の風景、体育館の中、教室等は、当時の雰囲気が残っています。校長としての残り時間が少なくなってきましたが、第八中学校の発展に寄与したいと考えております。

第八中学校に異動してから、二中学生の制服やジャージ姿を見るたびに、懐かしく思っております。また、現校長の高鍋先生から、教職員が丸になって生徒のために尽力している話を聞き、とても嬉しく思っております。今後も現教職員の皆様の尽力により、二中学生が一層健やかに成長することを願っています。

さて、私が勤務した二年間、同窓会の皆様には多岐にわたってお世話になり感謝しております。同窓会総会では、生徒の発表の場を与えていただき、和やかに応援していただいた皆様の表情や抽選会で抽選に当たった時の生徒の笑顔は今でも私の脳裏に残っています。会員の皆様がとてもお元気なこと、そして今でも第二中学校に愛着を持たれていることが伝わってまいりました。

地域の方々に尽力をいただいた職業教室では、同窓会の皆様

「独り立ちの気概に満ちた生徒の育成」

から「夢・命・絆」へ

24代校長 高鍋 誠太郎

二中間窓会の皆様の、日ごろからの本校の教育に対する様々なご支援に心から感謝申し上げます。

さて、市川市の真間・須和田・菅野・国分の閑静な住宅街の一角、須和田が丘にそびえ立つ市川二中。大きな公孫樹の木がある正門の所から眺める二中は、三階建のゆつたりとした造りの校舎とシンボルの大きな楠木と隣の黒松、大谷石で作られた自慢のスタンドや沢山の八重桜が、訪れる人の心を和ませてくれます。この二中から周りを見ると空が広く感じます。

私がこの二中を初めて訪問したのは昭和五十五年の五月でした。行徳にある市川七中へ理科の新米教師として赴任した私は、男子バスケットボール部の生徒達を連れて、春の大会以降、当時の二中顧問であった飯島三千夫先生を慕って、毎週のように合同練習に押し掛けていたものでした。体育館を使用できる時間はわずかで、多くを凹凸の校庭で練習しているという状況にも関わらず、その当時の二中バスケット部は男女ともに市内No.1の強さでした。「生徒は皆、礼儀正しいな。静かな所にある学校だな」が当時の私の印象でした。

あれから二十数年後の平成十九年の春、教頭として二中に赴任しました。市内で一番の地域環境、アカペラ混声四部合唱の素晴らしい校歌、独り立ちの気概に満ちた子どもたち、そして同窓会組織の存在に驚いたものでした。「伝統校の重み」を正に感じさせる学校でした。市内にこんな中学があったのかと。その後、勤務先が変わってからも、つい懐かしく思い毎年六月に

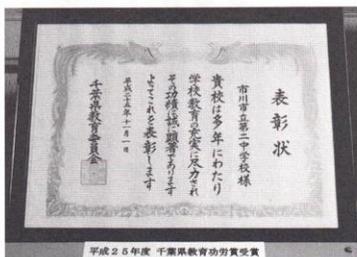
にも講師を受けていただきました。様々な職業の方から講話を受けていただき、学校教育目標の「夢・命・絆」の「夢」の実現に向かって大きく前進したのではないかと思います。

私は同窓会がホームページでの情報発信、会員相互の親睦、学校支援などを行っていることを学校自慢の一つにしておりました。全国的にみても、公立中学校の同窓会がこのように機能しているところは、それほど多くはないと思います。

同窓会を運営されている皆様に感謝を申し上げますとともに、第二中学校と同窓会がますます発展することを願っております。

祝 千葉県教育功労賞受賞!!

昨年11月1日付で「千葉県教育功労賞(団体の部)」を受賞しました。同賞は、千葉県教育委員会設置を記念して、昭和25年から学校教育・以下5分野について、永年にわたり千葉県の教育・文化の発展に寄与した個人及び団体の功績を称えるために実施されているものです。今回は、千葉県内の全小・中・高・特別支援学校の中から17校のみが選ばれた、大変名誉ある賞を受賞しました。



会報17号(2014)「二中ニュース」より

行われる同窓会総会には何度もお邪魔させてもらっています。また、同窓会再結成のきっかけとなった「市川二中五十年史」の出来栄え・内容には驚かされました。昭和二十二年の新制中学発足からの五十年間が手に取るよう分かります。当時の貴重な写真も多く掲載されています。中心となって作成に携わってくださった同窓会の方々の中魂・プライドと誠意を随所に感じさせる永久保存版の記念誌だと思えます。

私が教頭を務めていた当時は、二代目の篠崎實氏が桑村益夫氏から会長職を引き継いで頑張っておられました。その後、三村武教会長へ、そして昨年の夏からは、かつて広報の担当をしていらした斎藤康氏が会長に就任されました。その間、皆様の後輩である本校の生徒たちは、たくましく、そして爽やかな努力家になってきており、沢山の卒業生が教員の卵として教育実習に來たり海外に留学や赴任するための在学証明書を取得し見えてたりしています。そして今の在校生たちも、「夢・命・絆」と言う新しい学校教育目標の下、二中の輝かしい伝統を意識しながら勉強と部活動の両立を目指して日々努力しており、その成果も輝かしい実績や数値として表れています。正に、二中には安定感があります。

結びに、間もなく再結成後二十周年を迎えようとする市川二中の同窓会活動が、今後とも学校やPTA組織・地域と共存しあいながら、五十年先、百年先まで未長く引き継がれていくことを心から願ひ、お祝いの言葉とします。



会報16号(2013)「二中シンボルのクスノキ情報」より

校歌は昭和25年1月22日に完成、真間小講堂で完成発表会があった。同年3月の第1回卒業式で全校生徒が斉唱した。

作者は、作詞 浜田佐賀衛、作曲 平井保喜の両氏である。

浜田氏は歌人にして俳人。子息が当時二中で教鞭をとっていた縁で校歌の作詞をされ、作曲を浜田氏と同郷の縁で作曲家平井氏に依頼した。平井氏は後の平井康三郎である。

昭和38年に音楽担当の村上正治先生が着任された。その頃校歌は記録としてメロディーだけ残っていたが、実際に歌われていなかった。村上先生は、これを4部合唱曲に編曲し、校内合唱コンクールを催して全校生が愛唱するよう奨励された。

出典：『市川二中五十年史』



須和田台と真間・国府台との間は、自然地形としてはひと続きの台地であった。大正の中頃から戦後にかけての長期にわたる土取り工事によって、須和田台は西側の真間・国府台の台地から切り離され、さらには東側からも土取りが進み、大きく形を変えた。

二中は、東西を削り取られ独立丘となった関東ローム層の台地上に立地している。

創立当初は校門も垣根も弊もなく、真間口の通路は崖をよじ上るような階段状であったりした。

「二中新聞」12号（昭和26年5月21日）の紙面に、校門坂の浸食がひどく「二中昇仙峡」ともよばれているとある。このころ校門は真間口の坂の下にあり、校舎までの長い校門坂にももちろん街灯もなく、はげ山の名残りの赤土がむきだしのままの、道路というよりはむしろスキー場のグレンデのような広い坂であった。

昭和30年ころまでは、忠霊塔周辺と二中の敷地とははっきりした境界がなかったため、二中学生の格好の遊び場となっていた。同31年10月に須和田公園が開園すると、二中の正門に到る坂道や公園入口周辺が整備され、桜や銀杏が植えられた。

出典：『市川二中五十年史』



二中正門（昭和28年）

藤井寛子氏(7期)提供

登校風景（昭和42年）



『市川二中五十年史』より



原田健雄氏(13期)撮影

校門坂の春の西日

斎藤康氏(16期)撮影



須和田口（東側）の坂

二中への急な坂道（六所神社方）が、昨年一変しました。闊で著名な奥野氏邸が整地されて宅地になり、道路も拡幅されました。

会報20号(2017)「スクールゾーン」より

須和田 貞子
市川市立第三中学校 校歌作曲
(草深清)



校歌は同僚の飯登清氏と私の出身校千葉師範学校国文科教授 千葉實業専攻で歌人 俳人の濱田佐賀衛(坂井)に奉贈。
一日、先生は先生のお快として、真間山弘法寺の石段を、山下の龜井院の真間山戸を訪問、手右堂堂の草間川沿いの松を徘徊。因にこの松葉木は明和の戦勝記念に植わったこと。さらに因幡台により、龍潭寺の庭前遠く鏡を刻下の江戸川を望む散策と茶を飲んだ。
指名に「平井保喜氏」は、濱田先生のご指名に「おつた」とある。

二中校歌誕生の時代



宇野沢 璋(一期)

我々一期生は、新制中学1期生である。それまでの旧制中学、旧制高校、旧制大学が廃止されて、それぞれが新制中学、新制高校、新制大学へと生まれ変わった時代である。我々はそんな時代、昭和22年4月に二中に入学生した。昭和22年3月に卒業したのである。入学当時、二中は校舎がないので、真間小学校の二階の東側校舎を借りて授業を行っていたのである。敗戦後のこのような物資難又食糧難の時代であったが、先生方及び父兄の方々は校歌三番にあるように「熱く心を担う」「子供達を育てよう」と、熱心に我々を教育、指導して下さったのである。そのような昭和22年の秋、校歌発表会が真間小学校講堂で開催された。作詞者、作曲者、作詞者、濱田佐賀衛先生は、我々に



会報13号(2010)より

草深清先生は、市川二中開校時から2年間に在任されました。